昭和二十四年十月に入ったある日、数人が呼ばれて「移動するから支度せよ」とトラックに乗せられ、集結地から貨車でナホトカに送られた。ナホトカの幕舎では毎日共産主義万歳の教育洗脳を受けた。「日本に帰国したら、日本共産党と共にアメリカ帝国主義と戦え」と檄を受け、全員で拳を挙げて「エイエイオー」と応じた。

引揚船高砂丸に乗船する名簿の読み上げをするソ連将校が、片言交じりの日本語で番号と氏名を読み進む中、ア、イ、ウ……と頭文字順に呼び進んで、呼び残された同僚の寂しげな顔を残して乗船する。天にも昇る心持ちなり。

舞鶴港に上陸して復員手続きを済ませたが、ちょうど舞鶴に郷土出身の古久保恵美さんが日赤の従軍看護婦で勤めておられて、面会に来てくれたのは非常に嬉しかった。観音菩薩を拝む気持ちだった。

昭和二十四年十二月二十四日に長兄が南部駅まで出迎えてくれて、五年ぶりに母の懐に帰れた。帰郷後は若い頃習った大工職人として働く一方で、自家食糧確保の農業を兼ねて五十年経とうとしている。

いつ思い出しても収容所での前職者いじめの苦難は忘れ得ず、腹立たしい限りだ。今日でも憎しみは消えない。私の抑留期間を通じて皆が一番嫌う清掃作業が一番楽しかった思い出となって残っているのは、幸せというべきなのであろうか。

嗚呼、青春の五年間、お国に奉公する覚悟だったが、酷い青春物語となった。凍死を免れたのがせめてもの慰めだった。もう戦争をしてはいかんと子孫に強く申し付ける。

満州、シベリア、そして故郷へ

島根県　福本富清

大正八年十月、島根県木次町に生まれる。家族は祖母、父、母、私の四人だった。祖母は八十歳を越す長命で、当時恩賜木盃を頂いた。私が小五のとき八十四歳の高齢で亡くなった。

父四十歳、母二十五歳で四十二の二っ子とかで、捨て子の風習があり、生まれて間もなく産着に包み道の四つ角へ置いて帰り、隣家の人が拾って帰るとのこと。父母の年齢差のゆえんは、母が後妻で隣村から嫁いで来ていたためであった。

昭和九年三月尋常高等小学校を卒業後、地元の旅館料理営業の店へ住み込み見習いの修行に入った。父は魚の行商、母は少しばかりの野菜畑の耕作と近所のお手伝いをしていたが、二人目の子供を生んでから（死産）体が不調となった。私が住み込み見習いを始めたころから時々病に臥していたが、四十二歳の若さでこの世を去った。これから幾分でも親孝行が出来ると思っていただけに残念だった。

料理人として腕を磨くには大阪へ出ようと心に決めていたが、親一人子一人となり故郷を離れがたくなった。そのうちに戦時色がだんだんと濃くなり、青年学校の軍事訓練が活発になり、特に防空訓練が多くなり、小高い山の上に監視哨が設置され、生徒の我々にも交代で勤務が割り当てられるようになった。

一方、料理業も徐々に食材が品薄になり、歌舞音曲も禁止、いよいよ営業の継続が出来かねるようになってきた。

昭和十四年徴集の私も甲種合格、例年ならば翌年一月十日入営が一ヵ月繰り上げ入隊となり、その年の十二月十日、松江歩兵第六十三連隊へ現役兵として入隊した。初年兵教育を受けた翌十五年八月、満州駐屯のため連隊をあげて移動命令により宇品港を出港して北朝鮮羅津に上陸、列車で北満佳木斯に着き、さらに船に乗り換え、松花江を下り、黒龍江との合流地点より北西に向かった。二日間くらいで目的地羅北に到着した。河岸に位置した街で下船、当時一個大隊の兵員で二百五十人くらいと思うが、国境守備の任に就いた。到着後は対岸監視（高い望楼上より）、また演習は兵舎より五キロメートルくらい後方でやっていた。十一月頃になり四十キロメートルくらい後方の連隊本部のある鶴立鎮へ転属を命ぜられ、ここで大隊副官の当番兵兼事務室勤務を命ぜられた。

翌十六年四月頃と思うが、二十キロメートルくらい

北方の鶴岡炭礦のある興山鎮へ移動した。興山鎮は当時満州の五大炭鉱の一つで、素晴らしい良質炭が月産数万トン産出したという。

従業員も日本人千五百人（家族含む）、朝鮮人、満人、白系ロシア人、合わせて二万人くらい従事していると聞いていた。街は炭鉱街（炭鉱従事者）、満人街（一部日本人、朝鮮人もいた）に二分されていた。

駐屯部隊の兵舎は満人街のさらに北東三キロくらいの地点に新しく建設された。赤煉瓦造りの兵舎がなだらかな傾斜地に、一千人くらい収容可能な兵舎で、連隊本部、大隊、中隊と独立した建物、衛兵所、厩舎も完備されていた。将校や営外下士官も内地と同じ仕組みで、一キロくらい離れた官舎で居住するようになっていた。ちょうどその当時関特演で内地から召集された予備役の兵員で、我々の三年兵にあたる連中や輜重兵が特に多かった。

私は間もなく大隊長当番を命ぜられ、炭鉱街のある満炭兵舎の一部であった大隊長官舎に移った。

炭鉱宿舎街は一条通りから九条通りまで、定規で線を引いたように道も宿舎も整然と整備されていた。立派な本部社屋と日本人学校、郵便局、神社、水道施設、発電所、専用鉄道、病院、配給所、独身寮等、一通り完備されていた。その中に大隊長官舎があり、大隊長の身の回りの世話や掃除、洗濯、買い出し、食事の準備、風呂沸かしなどこなす雑事の多い毎日だった。また、時々大隊付の将校を呼んでパーティーを催すときは得意の料理作りで好評を得た。約半年間交代なしの勤務であった。

当時その炭鉱街に炭鉱会館が建設中で、宿泊施設や大ホールがあり、食堂とかパーティー会場として利用されるほか時には映画、演芸など多目的に使用する設備だった。

原隊では我々十四年徴集兵に除隊があるという噂が流れていた。もし除隊が実現すればこの新しい炭鉱会館が私の職場にピッタリと考えた。しかし現地除隊は親の承諾書が必要だったので、すぐ親元へ書類を送り承諾を得ることが出来た。

昭和十八年三月現地除隊が実現し、鶴岡炭礦株式会

社へ入社出来た。入社した職場は八十パーセントくらいの建設が進み、完成まで二、三ヵ月を要するとのことで、その間労務課の応援で奉天出張を命ぜられた。用務は中支方面で募集した工人（苦力）の輸送警備で、山海関—奉天—哈爾浜—佳木斯—本社までの道程である。私は奉天—哈爾浜間の護送任務で、一ヵ月の出張期間に三回くらい繰り返し従事した。任務を終えて帰社すると、係長より職場変更の勧めを受けた。「君は料理職より事務的能力を生かした方が将来すべての待遇が好条件となる」とのことで、迷ったあげく後者を選ぶことにした。

一方、南方戦線では戦況は益々拡大して、周囲の先輩や同僚が召集され作業量が多くなる一方だった。

現地除隊入社した者には一ヵ年経過すると一ヵ月間の有給休暇で故郷へ里帰りの恩典があり、これを利用して昭和十九年九月、懐かしの故郷へ、父親、親戚、友人、近所の人々にも五年ぶりに会うことが出来た。

十月上旬再び満州へ。内地では物資不足で生活は決して楽ではなかったが、それに比べ満州はまだまだ物資が豊富で、酒、煙草、砂糖も配給制度ながら十分あった。

昭和二十年に入ると、事務職の我々にも、石炭増産のため坑内作業が週二回義務付けられた。入坑初体験も出来た。

昭和二十年七月二十日、召集令状が舞い込み哈爾浜混成旅団へ入隊。在満の在郷軍人がほとんど召集されたのか、中隊長も年輩の中尉、兵は四十歳前後の難聴者や眼や脚の不自由な者もいた。私は召集と同時に事務室勤務を命ぜられた。事務室は普通准士官が仕切るのに、軍曹の階級で二人の年輩者だった。被服は新品の夏服が支給されたが、兵器類の支給なしで、三日くらい経ってから五人に一丁の小銃が支給されたが、中国製やソ連製で一昔以前の代物で、分捕り品であると思った。弾丸も無し、帯剣に至っては延鉄をグラインダーで削り剣の格好であるが、鞘は堅木板を二枚合わせ麻紐で三ヵ所くらい結んであり、このような兵器や兵員では戦闘できる状況でないとつくづく当時を思い出す。

部隊編成名簿を作成中、八月九日朝方、ソ連機の空爆あり。兵器類の支給のないまま市街地に出動して、戦車壕掘り作業に取りかかる。敵戦車の進入阻止の目的で主要道路のアスファルトを円匙とツルハシで徹夜で寸断する作戦。また小学校の校庭の隅へタコつぼ穴掘り作業を続けた。兵舎へは帰隊せず、市街地の松浦硝子店（日本人経営）を中隊本部として、近くには花園小学校の日本人学校や満鉄職員宿舎のあったことを覚えている。八月十五日の玉音放送により終戦となる。

哈爾浜の部隊兵舎前においてお粗末な兵器類を練兵場の一角に山積みして一路駅方向へ。このとき、現地召集された者、開拓団、在満商社社員、満鉄関係等、帰宅希望者は帰宅してもよいと上部より命令があったが、お互い生死を共にすべく、内地送還を期待して、ほとんどの者が団結行動を共にした。鉄道線路に従い牡丹江の近くの海林まで徒歩行軍が始まった。缶詰、甘味品、毛布類を持てるだけ携行したものの、暑さと過労のため体力も気力もなくなり途中で捨てるほかなかった。もっとも、あのとき毎日のように雨降りが続いたことが思い出される。三日四日くらいで海林到着。しかし途中の横道河子、海林等は戦闘激しく戦死した兵や将校がゴロゴロしていたが、敗残兵の我々はソ連兵の監視下でどうすることもできなかった。

ここでは約二週間くらい待機させられたが、携行した糧秣もなくなり、付近の畑へ出掛けトウモロコシや野菜ものなどをとって帰り食した。

いよいよ東京ダモイで、千五百人ぐらいの梯団編成で二段式有蓋車に詰め込まれて綏芬河経由ソ連領に入り、イズベストコーワヤの収容所へ入り、鉄条網に囲まれた丸太造りの比較的しっかりした建物だったが、電気なし窓ガラスなしの収容所で十日ぐらい過ごし奥地へ移動。収容所は点々と何カ所も移動したが、作業は伐採作業が主で、石割り作業、貨車積み、トラックへ木材積み込み作業。食べ物はどこも同じでいつも空腹を抱えながら飢えと寒さに耐えて丸二年間の抑留生活を送り、骨に皮がついている状態と言った方がよいかもしれなかった。

昭和二十二年八月、舞鶴に帰ることができた。

シベリア抑留記

島根県　小池繁徳

大正十四年十一月二十四日、島根県大原郡木次町で出生。寺領尋常高等小学校高等科卒業。家業の農業に従事する。

昭和十八年頃より戦況がだんだんと不利となり、徴兵年令が繰り上げとなり、昭和十九年五月、徴兵検査受検、甲種合格となり、同年の秋、現役証書到着。昭和二十年二月、福岡市博多東公園へ集合せよと記入されていた。兵科は野戦重砲兵で、部隊は満州第九三八部隊（野戦重砲兵二〇連隊）となっていた。福岡市で三日間くらい身体検査等のため滞在。満州という寒いところへ向かうためか衣服はすべて一装品が支給された。

博多港より軍用船で釜山へ上陸。乗船中は交代で敵潜水艦の見張りをさせられた。釜山より軍用列車で満州へ。目的地の部隊まで幾日かかったか忘れたが、途中列車は鎧戸がおろされて外の景色を眺めることは禁止されていた。駐屯地部隊は東安省斐徳というところであった。

野戦重砲兵二〇連隊の編成装備等は次の通り。

昭和十四年十二月編成。九六式十五センチ榴弾砲一個中隊四門保有で、完全編成六個中隊。牽引する機動力として全装軌式の九四式六トン牽引車が各中隊ごとに火砲用四両、弾薬車用四両、計八両が配備されていた。

さらに機械化重砲兵の特質を最大限に発揮せんがため、各中隊の編成下に次の車両が配置されていた。

指揮車　中隊長、中隊附属機関（命令連絡）用として一両。

観測車　指揮小隊長、観測掛射撃諸元算定掛用として一両。

小型車　戦術単位の連絡、命令受領者用として一両。